
黒天女の羽衣

ミドリ緑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒天女の羽衣

【Nコード】

N5791P

【作者名】

ミドリ緑子

【あらすじ】

楠野村には天女伝説があり、まれに年頃の娘が神隠しにあう事があった。神隠しにあった娘は、白天女と呼ばれ、天界で天帝の花嫁になるといふ。岳斗やまこはこの村の転校してきて、葉歌ようかという同級生と知り合う。葉歌はこの村の不思議にいち早く気がついていて、天界への扉も見つけてしまっていた。神隠しにあった葉歌は、白天女ではなく、天帝の災いとなる黒天女として、天界で命を狙われる。それを知った岳斗は、彼女を助けるために、天界へ向かおうとする……

天女伝説の記録

楠野村には大きな滝がある。

龍が勢いよくこの大地を移動しているように猛々しい滝が。

楠野村には古くから伝説がある。

天女伝説が。

楠野村には天翔神社がある。

天女伝説の由来となるほこらと、天女が帰っていく天界に続く石段がある。

天女伝説はこうである。

天界の王の繁栄を永遠のものにする白天女。

天界の新たな王を生むための黒天女。

天界へと続く石段を、村の一番静寂の時に上りなさい。

そして、時間の止まる夕日の赤い瞬間、振り返りなさい。

楠がさわさわつづやいている。

それを降りたら、何があるかなって問いかけてくる。

天女の羽衣を盗む男は誰だろう。

第一話 楠野村の転校生

夏木^{なつきやま}岳斗は祖母の田舎に単身越してきた。

父が外国へ転勤する事になって、母はそれについていく事になった。自分も行つてよかったのだけれど、母方の祖父母のところへ残ってほしいという両親の気持ちを理解した。それに、幼い頃住んでいた夏木の家はとても好きであつたから、それもよいと思つたのだ。

岳斗は今年、高校二年生だ。

楠野村という、それはそれとはんでもない田舎の、たった一つの高校に、彼は転校した。

一クラスたったの15人。

そして、そのほとんどが岳斗を知っていて、彼もまたそのほとんどを知っていた。

東京育ちの岳斗であるが、小学生の頃、これまた両親の転勤で、三年間この楠野村の夏木の家にあずけられていた事がある。そして、夏木の家は小学校の前にある。同級生や、小学校に通っていた子供たちと毎日遊んでいたし、人数も少なかったせい、誰だつて岳斗を知っていた。

彼が森戸高校に入学してきた日は、学校中が大騒ぎであつた。転校していく者あれど、転入してくる者は珍しい。それに、岳斗は東京から来た都会人。学ランに身を包んでいても、醸し出す空気は他の者とはまるで違った。垢抜けているのだ。

小学生の時、一番仲が良かった戸塚優とつかまさるが、真っ先に声をかけてきた。

「岳斗戻ってきたんだな!!」

「ああ、この村は何も変わっていないな」

そんな久しぶりの再会に、彼らは心躍らせる。岳斗の周りにはクラス全員の男子、総勢9名が集まっていた。このクラスは女子が6人しかない。

そんな女子の中に、一人、とても懐かしい子がいた。

小柄で、黒髪が肩までの、目の大きくて清楚な顔立ちの、別嬪たちばなな子だ。名前を橘透子たちばなとつこという。きつとこの村で一番の別嬪さんであるだろう。岳斗はすっかりきれいになった透子に、驚いた。

さつきから透子もちらが気になっているようだ。

小学生の頃は気兼ねなく遊んでいたのに、この年になってからはなかなか声をかけづらいのである。お互いに。

「透子は村の男たちに狙われている」

「は？」

優が唐突に話した。休み時間の事である。

「だってこの村は、嫁不足だもん。下から上まで、透子と結婚したがつているよ。でもあいつ、高校卒業したら都会の大学に行くんだってさ」

「……リアルな話だな」

「当然だ。その点俺は問題ない。手堅く美穂と付き合っているから」
優の言う美穂というのは、そんなに特別美人という訳でもなく普通の子であるが、優とは幼なじみで気の強い、しっかりした女子である。岳斗だって知っている。前からお互い好き合ってる風であったが、いよいよ付き合ってるという訳か。

「だから、透子は競争率が高いんだ。見ての通り美人だし、お前まで引越してきたから学校中が大騒ぎだぜ」

「……なんで？」

「だって透子はお前が好きだったんだから、昔っから。知ってるくせに」

岳斗は当然ぽかんとした。その顔が優には予想外である。

そんな、お互いがお互いにあっけにとられていた時、ふと岳斗の目に入ってきたのは、斜め前の女子である。茶色いウェーブの髪の毛、見知らぬ女子。違和感はそのセーラー服に似合わぬ都会風の空気である。透子ほど清楚な感じではないが、きつめで大人っぽい美人である。

「あ、あんな子いたっけ」

岳斗は小声で優に問う。優は「ああ」とそちらに目をよこして、

「桐谷葉歌きりたによつかっていう、お前より三ヶ月前に越してきた転校生だよ。」

都会から来た気取ったやつさ。でも、今まで村で一人勝ちだった透子と張れる、唯一の女子だ。今じゃ人気は二手に分かれている……透子の方が多いいけどな」

肩をすくめるように。彼には既に、関係のない事である。

斜め前の葉歌は、見た目の華やかさとは打って変わって、難しそうな本を読んでおとなしくしていた。まだこのクラスになじめていないようである。

岳斗は夏木の家に戻ってきて、祖母と祖父の畑仕事を手伝おうと言ったが、彼らは遊んできなさいと言った。仕方がないので、父に買ってもらった一眼レフカメラを持って、裏の開けた田んぼ道を歩いては、夕方の紫かった雲の流れにため息をついた。都会ではまるで見る事のできない、広い広い空と、ピンとした空気のおい。夏なのに、山の奥地の村だけに夕方は少し肌寒い。

人も車も何も通りつこない道を歩いて、大きな川をのぞく。

その脇を歩いて、ただいろいろな懐かしさに心奪われていたときだ。

切り立った山の、小さな神社の鳥居の前で、紺のワンピースを着た

長い髪の少女が、今まさに鳥居をくぐって階段を上ろうとした。
岳斗はその少女を、さっき学校の同じクラスで見た。

『……桐谷葉歌だ……』

彼はびっくりして、「おい!!」と声をかけてしまった。そんな自分にもびっくりだが、声をかけられた彼女はもつと驚いていた。
葉歌は三段上ったところで振り返った。彼女はとてもスタイルがよく、腰元できゅっと結んだ型のワンピースがよく似合っている。

「……あ、ごめん……」

「……………」

岳斗はとっさに謝った。お互い都会で育った身であるが故に、他人に干渉する事への違和感があったから。
しかし、葉歌は驚いた顔のまま、

「なんで謝るの？ 夏木君」

と言うのだ。

「……俺の名前……」

「知ってるわよ、今日転校してきた夏木君。噂のイケメン君」

彼女はニヤリと意味深に笑って、アーモンド型の整った瞳を細める。
それがとても心地よくらいに美しい。

学校では、都会風だなあと思っていたが、いざこうやって対面してみると、こういう雰囲気のある子は都会にもなかないかと思

った。

「どうしてこんなところにいるんだ？」

「……なにつて……散歩よ。私、この村が好きなの。いろいろなところに行ってみたいじゃない？」

「一人で？」

「そうよ」

彼女はころころ笑って、軽やかに二、三段階段を上った。そしてまた振り返る。

「あなたは何をしているの？」

「……散歩……かな……？」

岳斗は視線を斜めにそらして、頭をかいた。それ以外に言葉が見つからず、結果彼女と同じになってしまった。彼女は何だかとても驚いたような、得意げなような。

学校では鉄仮面のように気取っているくせに、目の前にいる彼女は表情豊かで、少しずるい。

「ねえ、夏木君こっちに来て」

彼女は細いサンダルで、神社の石段を駆け上った。呼ばれた岳斗は慌てて彼女を追う。彼女は後少しで神社の境内に着くというところで、立ち止まった。

「どうしたんだ」

「ねえ、夏木君……この村の不思議を知っている？」

「……？」

彼女は振り返って、階段の下を指差す。

岳斗も彼女の視線を追うように、階段の下を見た。

岳斗が驚いたのは、階段の下の方がまるで見えなかったからだ。というのも、ずっとずっと階段が続いている。さっき上ってきたはずの鳥居が見えない。

ずっとずっと下まで、階段が続いているのだ。そして紫の霧が漂って溜まっている。

「何だ……これ……」

「驚いたでしょう？ この村って、変なのよ。というか、この場所かしら……いつもこの時間帯に、この神社の石段を上って、境内に着くちょうど5段下で振り返ると、いつもこうなるの……。まるで、階段の下は別の世界につながっているみたいに」

「……………嘘だろ……」

岳斗は信じられないというように、葉歌を見た。葉歌はじっと下界の方を見つめている。何とも言えない瞳が気になった。

彼女は小さく首を振って、下界に向けていた瞳を逸らして、岳斗の服を引っ張って一段階段を上るように言った。岳斗と葉歌は同時に一段上って、再び振り返る。

すると、下界の方はすっかり元通りの風景であり、下は神社の入り口が見え、鳥居の上にたくさんの石が乗っているのがわかる。

「今のは夢じゃないんだよな」

「夢じゃないわ。私も今まで、夢なのかと思っていたけれど、あなたが一緒に見てくれたから、私だけが見える訳じゃないって分かったもの」

「……あの下には何があるんだ？」

あの、どこまでも続く霧の立ちこめる階段を下った時、いったい何を見るのだろうか。

岳斗は眉間にしわを寄せ、考え込んだ。驚きもあつたが、何とも興味深いと思える。

「分からない。でも、いつも行ってみたい、下ってみたいと思って、ためらうのよ。それでもきつと私は、また明日もここへくるのでしようね……」

葉歌は小さくため息をついた。

既にただの階段で、下界のはつきりと見える普通の景色を目に写し。それでも彼女は、あのどこまでも続く階段を見ていたと思う。

誰もいない寂れた神社の、高い楠の木がさわさわ風に揺れて、葉をこすらせている。

蝉の鳴き声と、遠くの滝の音と、夕暮れの匂いがやけに胸につく。

言いようのない不思議な感覚は、この神聖な聖域ならではの
うか。

この神社を、あまかけるじんじや天翔神社と言った。

第二話 葉歌と岳斗

葉歌は変わった女子だった。

岳斗はそんな彼女ばかりを、いつも目で追っていた気がする。

気の強そうな顔をしているのに、あの日から神社で会うようになった彼女は、とてもおしゃべりで雰囲気があつて、こころ表情の変わる女の子だと。学校ではつんつんしているように思われているけれど、だからこそ、自分しか知らない彼女がいるみたいでうれしいというのもあつたかもしれない。

岳斗と葉歌は、学校で話す事はなかったが、夕方になると必ず葉歌は神社にいたので、岳斗もそちらに足を運んだ。

「岳斗君ももの好きね。普通ならこんな不気味な事に付き合つてくれないわよ」

神社の石段の上から五段めに、葉歌と岳斗は腰掛けて、いつもたわいもない話をしていた。

「だって、気になるし……」

岳斗は持つてきていた板チョコの包み紙を開け、いくつか砕くと彼女に差し出した。彼女はうれしそうにそれを手に取り、口へ運ぶ。いつだって彼女は、うれしそうにしてくれる。

自分がここへ来ても、とてもうれしそうにしてくれるから、もしかしたら岳斗はここへ来てしまうのかもしれない。

「学校の女子たちは、岳斗君の事をとても噂しているわ。当然よね、

あなた垢抜けているもの。学校で一番美人な透子さんだって、いつもあなたばかり見ているわよ。私ね、学校ではおとなしくしているでしょう？　いろいろな人を観察しているから分かるのよ」

「……葉歌はなんで学校で、あんなにおとなしくしているんだ。感じの悪い子って思われてるぞ」

「仕方ないわ。友達が欲しくない訳じゃないんだけど、転入初日から嫌な噂しか流れなくって、誰も私に近寄らないの。あなただって聞いた事あるんじゃないの？　私が前の学校で手に負えない不良だったとか、男をとつかえひつかえするような女だったとか……。はあ、なんで若い女の子ってこういう話が好きなのかしらね。前の学校からずっとおとなしい子だった私がこんな噂を流されるようになるなんて、いいご身分だわ。昔から村にいる子たちになじむのは、相当な努力と根気が必要なのうね。でも、いいの……今は岳斗君がお話してくれるもの。でも、学校では私に話しかけない方がいいわね、うん」

葉歌は石段から、視線を遠くに向けている。

岳斗だって学校では、彼女と交流を持つのを避けている。彼女はとにかく、女子たちの間での評判がすこぶる悪い。美人であるのが女子たちの嫉妬を買っているのか、女子にも人気者の透子との比較対象にされている。

それでも岳斗は、葉歌がこの村で一番、興味深い女子だと思っていた。

「話しかけてほしくないのかと思ってたよ。だって君、学校じゃいつも難しそうな本ばかり読んで、機嫌悪そうな顔をしているから。あれって勉強してるの？　葉歌、いつもテストで一番なんでしょう

？ 透子が今まで一番だったのに、君が抜いたんだって優が言っていたぞ」

「やる事ないから勉強しているのよ。それに、本は読んでいるふりをしているのよ。本当は他の人たちの会話を聞いてたりするの。聞きたい事も、聞きたくない事も……」

「それって楽しいの？」

「楽しい訳ないじゃない。私の悪口が沢山飛んでくるもの。でも、別に気にしてもいないの」

茶色のウェーブの髪が、ふわりと夏風に吸い込まれていく。彼女は大きなアーモンド型の瞳を、意味深に細めた。そういう印象的な表情が、より彼女を美しく見せるのだ。だからドキツとする。こういう女子はなかなかいないと思う。

一番美人だって言われている透子だって、こうはいかないと思う。

彼女は腕時計を見て、顔をしかめた。

「……今日は階段の下、何ともないわね。夕日が雲に隠れちゃって
るからかしらね」

「こういう日だってあるさ」

二人は何も起こらなかった神社の階段を見下ろした。
あの、不思議な世界へと続く長い階段。あれはいつたい何なのだろう。

「知ってる？ 岳斗君……」

「何が？」

「この村って、天女伝説があるんだって。さっき言ってたけど、私、今日教室で聞いちゃったの。村長さんの孫の吉城さんが、言ってたのよ。何の事かしら……」

きょんとした瞳で見つめてくる彼女に、岳斗は首を傾げた。
そんな話、友人にも聞いた事がない。

「さあ……古い伝承か何かか？ こういう村には、そういう曖昧なものって結構あるんじゃないかな。まあ……うちのじいちゃんとはあちゃんに聞いたら何か分かるかもしれないけど……」

「もしかしたら、この神社の現象と関係があるのかもって思ってたけれど……」

彼女は心なしか、生温い風にぶるっと体を震わせた。
何だろう、とても寒気がしたのだ。

「ああ嫌だ……何だか怖いわね」

「今更何言ってるんだか。毎日ここへ来て、あの底なしの石段を見ているくせに……」

「そう……そうよね……」

彼女は「嫌だわ私」と、強がって、立ち上がると背伸びをした。
彼女が石段を軽快に下りていくのを、岳斗はふっと微笑んで見下ろ

した。そして、彼も立ち上がって、石段を下りようとした。

その時の、背後に迫ってきた視線という名の突風に、彼は胸を打つような感覚に陥って、振り返るのだ。

『オリテオイデ……クダツテオイデ……シロイハゴロモ……』

音は、そのように聞こえた。

響いた気がした、心のどこかに引っかかってくれるように。

それでも、岳斗は気のせいだと思い込んで、嫌な胸騒ぎのまま石段を下った。下では葉歌が彼を待っている。

既に夕刻は過ぎ、淡い紫の星空には星がはためいている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5791p/>

黒天女の羽衣

2010年12月19日03時55分発行